女子大生家庭教師
魅惑のご褒美レッスン
早瀬真人
挿絵 ズンダレぽん
試し読み版
リアルドリーム文庫

Contents

目次

第一章　清楚な美人家庭教師……4
第二章　お姉さんのパンティ手コキ……41
第三章　極小ビキニと愉悦のバキュームフェラ……76
第四章　美人女子大生との禁断のアナルセックス……128
第五章　美人家庭教師のスケスケレオタード……162
第六章　麗しのお姉さんは僕だけの女王様……215

登場人物 *Characters*

夢野 莉沙子
（ゆめの りさこ）

名門女子大に通う十九歳。さらさらのロングヘアが魅力的な才色兼備の清楚なお姉さん。母親同士の繋がりから裕太の家庭教師になる。

加納 裕太
（かのう ゆうた）

進学校に補欠入学した十[redacted]歳の高校[redacted]年生。入学してから勉強に身が入らず落ちこぼれる。性欲旺盛なフェチ願望の強いマゾっ気のある童貞少年。

第二章　お姉さんのパンティ手コキ

1

パンツの中に暴発してしまったその日の夜、裕太は風呂からあがると、逸る気持ちを抑えながら自室に向かった。

夕方のみっともない姿を思い返せば、確かに羞恥心は消え失せない。

裕太はトイレで汚れたパンツを始末したものの、滾る牡の欲望はいっこうに収まらず、一発抜いてから部屋に戻ったのである。

莉沙子は申し訳なさそうな顔をしていたが、頬は桜色に染まったままだった。

（直穿きしていたパンティをくれたんだから、やっぱり恥ずかしかったんだろうな）

考えてみれば、彼女はノーパン状態で勉強を教えてくれたのだ。

思いだしただけで、足がスキップをするように弾んでしまう。

再び牡の性欲を燃えあがらせた少年は、部屋に足を踏み入れるやいなや、勉強机に鋭い眼差しを向けた。

いちばん上の引き出しには、莉沙子の使用済みのショーツが入っている。
目を血走らせた裕太はTシャツを頭から抜き取り、息せき切ってハーフパンツを下着ごと脱ぎ捨てた。
今日は二回も射精したのに、ペニスはビンビンに反り勃ち、亀頭冠は天井を睨みつけている。
胴体には早くも、葉脈状の血管が無数に浮きでていた。
「はあはあ……莉沙子さんのパンティ」
荒い吐息をこぼし、机にふらふらと歩み寄る。
引き出しをそっと開けただけで、甘やかな芳香が鼻先にまでふわりと香った。
口の中に溜まった唾を飲みこみ、期待に胸を膨らませつつ純白のショーツを手に取る。目の高さに掲げれば、柔らかい布地ははらりとほぐれ、眼前にその全容をはっきりと現した。
(り、莉沙子さんのパンティだっ!)
ウエストラインに縁取られたフリル、フロントの上部にあしらわれた小さな赤いリボンが愛らしい。
両サイドが細いビキニショーツは、間違いなく莉沙子の下腹部を覆っていたのだ。

「パ、パンティって、こんなに……小さいんだ」
極小布地がまろやかなヒップを包んでいたとは、とても考えられない。
手触りはやたらなめらかで、いまだに美女の温もりを残しているかのようだ。
鼻をそっと近づければ、ローズの香気が匂い立った。
(な、何で……こんなにいい匂いがするんだ?)
香水でも振りかけているのか、それとも女性の体臭そのものなのか。
汗臭い男の下着とはあまりにも違いすぎる。
心臓をドキドキさせながら股布の中心に鼻面を寄せると、さらに甘酸っぱい匂いが鼻腔粘膜にへばりついた。
嗅覚を研ぎ澄ませ、犬のようにクンクンと嗅ぎまくる。
柑橘系の果実に近い匂いだが、より濃厚だろうか。
かぐわしい芳香が鼻腔を突くたびに、昂奮のボルテージは上昇の一途をたどった。
男なら当然のごとく、女陰を押しあてていた裏地が見たくなる。
(ど、ど、どうなってるんだろう?)
あまりの昂奮で、心臓が今にも口から飛びでてきそうだ。
我慢の限界を迎えた裕太は、両の指で船底をゆっくりと押しあげていった。

（す、すごい、まだ湿ってるよぉ）
湿気を含んだ生々しいショーツは、紛れもなく莉沙子の分身なのだ。
神秘のベールに包まれた裏地を剥きだしにさせた瞬間、裕太は目を大きく見開いた。
「あ、あ……」
中心部は明らかに変色し、レモンイエローの縦筋がくっきりと刻印されている。
ハート型にべったりと張りついたグレーのシミに、童貞少年は大きな衝撃を受けた。
女性器の構造上、仕方のないこととはいえ、いかにも清潔そうなお姉さんがこれほど下着を汚していようとは……。
それでも牡の性欲は深奥部で逆巻き、ペニスがムズムズと疼きだした。
清廉な外見とのギャップが、倒錯的な昂奮を与えるのだろうか。
（り、莉沙子さんが、ここにおマ◯コを押しあてていたんだ）
すぐにでも肉棒をしごき、至福の射精に酔いしれたかったが、すぐに放出してしまったのではもったいなさすぎる。
目を据わらせた裕太は、センターラインに鼻先を近づけた。
オレンジの皮を干したような香りに続き、スモークチーズに似た匂いとアンモニア臭が微かに匂い立つ。

複雑にブレンドされた恥臭は、すべて莉沙子の身体から分泌されたものなのだ。
「あぁぁ、すごい……すごいよ」
少年は切なげに呟き、腰をもどかしげにくねらせた。
心の琴線を爪弾かれ、胸が甘く締めつけられる。
「り、莉沙子さんの……おマ〇コの匂い。も、もう我慢できないよ」
淫らな布に鼻を押しつけ、熟成されたフェロモンを吸いまくれば、今度は蒸れに蒸れた汗と皮脂の匂いが鼻腔を燻す。
ツンとした刺激臭がより強烈になり、裕太は瞬時にして目をとろんとさせた。
「あう……あうぅぅっ」
莉沙子の恥部に顔を埋めているような錯覚に陥り、布地に染みこんだ淫臭のハーモニーが脳髄をどろどろに蕩かしていく。
裕太は顔を小刻みに振り、ふしだらな媚臭を鼻面にこれでもかとこすりつけた。
ペニスは今や下腹にべったりと張りつき、鈴口からは早くも大量の前触れ液が溢れでている。
右手を股間に伸ばしかけた瞬間、少年は顔をパッと輝かせた。
（そ、そうだっ！）

ただオナニーするだけでは、怒濤の昂奮は鎮まりそうにもない。
生唾を飲みながらベッドに腰かけ、ウエストラインを広げて片足を通していく。
裕太が考えた究極のオナニーは、莉沙子のショーツをじかに穿くことだった。
美女の恥肉を覆っていたクロッチが、自分の男根を包みこむ。なんと、素晴らしいアイデアなのか。
昂奮が昂奮を呼び、全身の細胞が官能の渦に巻きこまれた。
莉沙子と一体感になれるような感覚に総身が震えた。
(でも……こんな小さなパンティ、果たして穿けるのかな?)
裕太は身長が百六十五センチのうえに、かなり痩せていて腰も細い。
とはいえ、男と女ではもともと骨格が違うのだ。
一見すれば不可能だと思うも、試してみる価値は十分にある。
裕太はもう片方の足をショーツの裾に通し、布地を慎重に引きあげていった。
(あ、やっぱり……ちょっときついかも)
パンティが太腿の中途で引っかかり、悔しげに唇を噛みしめる。
少年は困惑したあと、まなじりを決してショーツを強引に引っ張りあげた。
「お、ふっ」

下腹部をぴっちりと包みこんだ布地の感触に、裕太は驚愕の声を洩らした。
（な、何だよ、これ。き、気持ちよすぎるぅ）
やんわりとした肌触りは、ごわごわした男の下着とはまったく違う。
デリケートな箇所を守るために、繊細でなめらかな生地を使用しているのだろう。
青白い性電流が背筋を這いのぼり、あまりの心地よさに陶然としてしまう。
さらにショーツが肉筒に張りついた状況が、今までにない新鮮な昂奮を少年にもたらした。
（り、莉沙子さんのパンティが、お、俺のチンポにぃぃっ！）
宝冠部はショーツの上縁からはみ出ていたが、ペニスの裏茎や腰と鼠蹊部に食いこむゴムの感触が気持ちいい。
裕太はベッドに横たわり、股間に狂おしげな視線を向けた。
もっこりとした膨らみに気が昂り、睾丸の中の精液が暴れまくる。
これ以上は、とても我慢できそうにない。
裕太は内腿をすり合わせ、震える両手を下腹部にゆっくりと伸ばした。
「あ、あぁ」
ショーツの上から裏茎と陰嚢をさすれば、美女の恥臭をたっぷりと含んだ布地がさ

らに密着する。
湿気混じりのこもりにこもったフェロモンが牡の肉に浸透し、巨大な喜悦が身体の内から溢れこぼれた。
（はあぁっ、莉沙子さん、好き……好きですぅぅっ）
美人家庭教師の面影を思い描けば、筋肉ばかりか骨まで蕩ける愉悦が吹き荒れる。
腰をくなくなと揺らし、柔らかい布地越しにペニスを揉みしだくと、凄まじい快美が股間から脳天を光の速さで突っ走った。
「あ、あ、イクっ、イクっ、イッちゃう」
甘ったるい感覚が下半身を覆い、強烈な極彩色が頭の中を駆け巡る。
脳幹が痺れ、電気ショックを受けたように臀部がベッドから跳ねあがる。
裕太はビクビクと身をひくつかせたあと、大量の精液を腹部から胸にかけて噴出させた。

2

十月四日　火曜日　――。

四回目の小テストは点数が上がらず、五回目の小テストでは何とか三科目の成績を伸ばせた。
莉沙子が答案用紙を確認する最中、期待感から総身が粟立つ。
今日は、どんなご褒美が待ち受けているのだろう。
二回目以降は莉沙子が褒美の内容を決める約束になっており、いやが上にも期待がかかった。
「うん、よくやったわね。でも……点数自体は思ったより伸びてないわ」
「す、すみません。一生懸命やってるんですけど」
「まさか……手を抜いてるんじゃないでしょうね？」
「え？　ど、どういう意味ですか？」
「いっぺんに点数を上げちゃうと、そのあとがきつくなるでしょ？」
莉沙子の指摘を受け、裕太はハッとした。
確かに、彼女の言うとおりだった。
百点満点に近づけば近づくほど、その後の点数アップはより厳しくなる。
とはいえ、今の裕太に手を抜いてまで三科目の成績を伸ばす自信は少しもなかった。
「これでも……必死なんです」

「ふふ、わかったわ。一歩ずつ進んでいきましょう」
莉沙子は優しげな微笑を返し、椅子を引きながら身体をすり寄せる。
今日の彼女は、グレーの薄手のセーターに白いレディースパンツを穿いていた。
襟元はVカット仕様で、鎖骨の窪みと胸元の生白い肌が微かに覗いている。
ストレッチ素材のパンツは下腹部にぴったりと張りつき、官能的なカーブを描くヒップとすらりとした脚線美をより際立たせていた。
(スタイルがいいから、パンツも似合うんだろうな。後ろから見ると、カッコいいとさえ思っちゃうよ。でもパンツだと、生足やパンティを見られないのが難点かな)
残念な気持ちがないわけではなかったが、それでも胸が騒ぎ、海綿体に血液が集中しはじめる。
「それじゃ、ご褒美をあげなきゃね」
(き、来たぁぁぁぁっ!!)
「やっぱり、勉強前のほうがいいかな?」
「は、はいっ!」
甘い果実臭が頬をすり抜けると、裕太は緊張感に身を強ばらせた。
莉沙子は、柔らかい温かみのある手を少年の右手の甲に重ねる。そして指を絡めた

あと、自身の胸へと導いた。
「いいよ……胸とお尻、触って。でも、服の上からだよ」
「あ、あぁっ」
ふっくらとしたバストの感触に、裕太は驚きの声をあげた。
服とブラジャー越しとはいえ、お椀を伏せたような膨らみは手のひらにずっしりと重みを伝えてくる。
椅子を真横に向け、身体を寄せていくと、胸元から甘酸っぱい匂いが立ちのぼった。
(や、柔らかい。それに……やっぱりすごく大きいぞ)
力を込めずとも、指先は小高い丘陵にめり込んでいく。
キュッキュッと揉みこめば、莉沙子は軽く目を閉じ、切なげに舌先で唇をなぞりあげた。
あどっぽい女子大生の顔つきが猛烈な淫情をそそらせる。
(お、女の人の身体って、ホントに柔らかいや)
裕太は鼻の穴を目いっぱい開き、バストの感触を堪能しながら空いている左手を下方に伸ばした。
円を描くようなヒップに手のひらを這わせれば、指先を押し返す弾力感に満ち溢れ

ている。
つきたての餅さながらの手触りに、少年の昂奮は一足飛びにピークへと達した。
ジーンズの股間は隆々と盛りあがり、早くも臨戦態勢を整えている。
莉沙子も少なからず昂奮しているのか、身体が燃えるように熱い。
汗ばんだ首筋や胸元から甘やかなフェロモンが放たれ、童貞少年をさらに発情させていった。
中心部から射精感が突きあげ、副睾丸に溜まった欲望の証が荒れ狂う。
(あぁ、服の上からなんて我慢できないよぉ)
生の乳房やヒップを見たい、触ってみたい。
激しい性衝動に駆られた裕太がセーターをたくしあげようとすると、莉沙子は気怠げにたしなめた。
「だめよ……これ以上は」
「え?」
「ご褒美はおしまい。さ、勉強を始めましょう」
「そ、そんな……」
前回のディープキスと対面座位からの腰振り、そしてパンティプレゼントと比べた

らあまりにも物足りない。
媚びを含んだ視線を向けても、莉沙子は素知らぬフリで数学のテキストを開いた。
「莉沙子さん。も、もう少しだけ。この前は、もっと過激だったじゃないですか」
「あの日は特別だって言ったでしょ？　二学期のテストは、中間と期末合わせて十五回もあるんだよ。まだ三分の一しか過ぎてないのに、裕太君が考えているようなご褒美を今からあげたら、あとの楽しみがなくなっちゃうでしょ？　私だって、ちゃんと考えてるんだから」
彼女の言うことはもっともだったが、煮え滾る情欲はどうにもならない。
明らかに、自ら課した禁欲生活が原因だった。
ショーツをもらったその日から、裕太は日に二回三回と自慰行為を繰り返した。
おかげで勉強に集中できず、四回目の小テストは三科目ともアップさせられなかったのである。
自分を戒めようと、一週間のオナニー禁止を強いたことが仇となってしまった。
（あぁ、今度のご褒美を期待しすぎた俺がバカだったんだ。生のおっぱいやお尻はもちろん、あそこを見せてくれることまで妄想してたもんな）
仕方なく机に向きなおるも、股間の逸物は少しも萎えない。

いつまで経っても勉強モードに入らず、小さな溜め息がこぼれるばかりだった。
「うん。この問題、今度のテストに出そうだわ。ちょっと、やってみてくれる？」
「は、はぁい」
知らずしらずのうちに、やる気のない口調で返答してしまう。
数学の問題を解きながらも、いまだに裕太の頭の中は淫らなご褒美に占められていた。
「あの……」
「ん？　もう終わったの？」
「いや、まだですけど、その……」
「何よ。男なら、はっきりと言いなさいよ」
「今後の参考までに聞いておきたいんですけど、今の時点でどんなご褒美を考えているんでしょうか？」
丁寧な言葉づかいで心の内を探ろうとするも、今度は莉沙子のほうが深い溜め息をついた。
「もう……何が今後の参考よ。それしか興味がないの？」
「いや、決してそういうわけじゃなくて、勉強に集中するためにも先に聞いておいた

ほうがいいかなと思いまして」
美人家庭教師は頬をプクッと膨らませたあと、突き刺すような視線を裕太の股間に向ける。
ペニスは相変わらずテントを張ったまま、巨大な三角の頂を見せつけていた。
「……いやらしい子」
「あ、莉沙子さんに言われたくないですっ！　莉沙子さんのほうが、僕なんかよりよっぽど……」
「しっ！　そんな大きな声を出したら、下に聞こえちゃうでしょ」
「ご、ごめんなさい」
しおらしい態度で謝罪すれば、莉沙子は口元に片手を寄せてクスリと笑う。そして目尻を下げ、艶然とした微笑をたたえながら言い放った。
「……わかったわ。じゃ、勉強に集中できるご褒美をあげる」
「え、いつ？　今日ですか？」
「そうよ。だって、しょうがないでしょ？　そわそわして、これじゃ勉強どころじゃなさそうだもの」
現金にも、頬が自然と緩んだ。

美しい容貌ばかりでなく、裕太は莉沙子の優しい性格が大好きだった。
なんやかんや言いながらも、麗しのお姉さんはどんな我が儘も聞いてくれるのだ。
「でも、ご褒美はおばさんがお茶菓子を持ってきたあとだからね。それまでは、我慢して勉強すること。わかった？」
コクコクと頷き、ただちに与えられた課題に取りかかる。
（どんな、どんなご褒美なんだ!?）
あらゆる痴戯が脳裏をよぎるも、約束だけはきっちりと守りたい。
（いかん、今は勉強に集中するんだ！）
淫らな妄想を無理にでも頭から振り払い、裕太は真剣な顔つきで二次方程式を解いていった。

3

待ちに待った休憩時間を迎え、ペニスはギンギンにいきり勃っていった。
母親はお茶菓子を持ってきたあと、莉沙子とたわいもない世間話をしている。
早く出ていってくれと切に願いつつ、裕太は口の中に詰めこんだケーキを紅茶で胃

の奥に流しこんだ。
「莉沙子ちゃん。それじゃこのバカ息子のこと、よろしく頼みますね」
「はい」
余計なお世話だと思う一方で、胸が甘く締めつけられる。
母が部屋から姿を消すと、莉沙子はクスリと笑った。
「やだ、早い。もう食べちゃったの？」
すでに心はご褒美へと飛んでおり、今はお茶菓子を食べている時間さえ惜しい。
もちろん、今は童貞喪失などという身の程知らずな行為は考えていなかった。
階下には母がいるし、莉沙子の言うとおり、二学期のテストは三分の一が過ぎたばかりなのだ。
（大それたご褒美は、やっぱり期待できないよな。生のおっぱいやお尻を触らせてくれるといったところが妥当かな？　ディープキスも、もう一度体験したいかも）
麗しの女子大生は椅子に背もたれ、紅茶を啜りながら英語のテキストに目を通している。
「この構文は最重要だわ。大学の入学試験でも出題頻度は高いから」
裕太にとっては、もはや勉強どころではない。

休憩時間に入ったと同時に性欲モードへと突入しているのである。
そわそわと落ち着きなく肩を揺すった瞬間、股間に白い手がスッと伸びてきた。
（えっ!?）
しなやかな指が股間の頂に絡みつき、さわさわと優しく撫でさすられる。
横目でうかがえば、莉沙子はまだテキストに目を落としたままだった。
平然とした表情を見た限りでは、とても淫靡な行為をしているとは思えない。
指先はピアニストにも似た繊細な動きを見せ、ペニスの質感や量感を確かめるように這いまわった。
キュッキュッと軽く握られるたびに、甘美な電流が背筋を駆け抜ける。
恥骨の膨らみでペニスをこすられたときは、あくまで偶然の産物だったが、今度は莉沙子が自らの意思で男の恥部を玩弄しているのである。
ペニスに受ける快感もより強烈で、裕太は瞬く間に恍惚の顔つきに変わっていった。
「あ、あぁ」
「気持ちいい？」
「き、き、気持ちいいです」
エッチなお姉さんはテキストを机に置き、身体を真横に向けてから艶っぽい視線を

投げかける。そして、口元にソフトなキスを見舞った。
「ふふっ、かわいい」
「あ、あ、く、くふぅ」
椅子に身体を預けた状態で、切なげな喘ぎ声が絶え間なくこぼれてしまう。
すでに脳漿は煮え滾り、ズボンの下のペニスは鉄の棍棒と化していた。
「休憩時間まで、よく我慢したね」
「あ、り、莉沙子さんのご褒美がどうしてもほしかったから……」
「与えた課題も、全問正解したものね」
「あうっ！」
莉沙子は耳元に唇を寄せ、吐息混じりの息を吹きかける。
こそばゆい感覚に全身がブルッとわなないた。
「裕太君のおチンチン、コチコチだよ。こんなに大きくなっちゃって」
「は、はあぁぁっ」
可憐な唇のあわいから男性器の俗称が飛びだすと、裕太の性衝動は激しく燃えさかった。
ゾクゾクとした快感が、頭のてっぺんから足の爪先まで拡散していく。

「ズボンの布地が張り裂けちゃいそう。エッチな男の子には、たっぷりとお仕置きしなきゃだめかな？」
「あう、あう、あうぅぅっ」
あまりの昂奮で、頭が爆発しそうだった。
莉沙子はパソコン内のエロ画像から裕太の性嗜好をすべて知っており、あえて女王様風の演技をしているだけなのかもしれない。
たとえそうだとしても、魅惑的なお姉さんの誘い文句は甘いしぶきとなって身を蕩かせていった。
「この前みたいに、パンツの中に出させるわけにはいかないし……手でしてあげようかしら？」
「え、え、え、手、手でっ!?」
脳天を稲妻が貫き、ペニスがドクンと熱い脈を打つ。
しなやかな指で肉筒をしごかれたら、いったいどれほどの快美を与えられるのだろう。
手コキのご褒美を考えないわけではなかったが、まだ先のことだと思っていただけに、裕太は心の中で快哉を叫ぶばかりだった。

（莉沙子さんが、チンポを手でしごいてくれる。やった、やったぁぁっ！）
虚ろな視線を自身の股間に注ぐなか、細長い指先が伸び、ジーンズのホックが外される。
チャックが引き下ろされた瞬間、裕太はある重大な事実に気づいた。
「あ、あっ⁉」
「何、どうしたの？」
素っ頓狂な声をあげれば、莉沙子は怪訝な表情で手の動きを止める。
「あ、あの……それは」
裕太は顔を真っ赤に染め、言いかけた言葉を呑みこんだ。
女子大生は小首を傾げたまま、少年が放つ次のセリフを待ち受けている。
「や、やっぱり……ちょっとまずいかなと思います」
「どうして？　ご褒美、ほしくないの？」
「だって、今日のご褒美はもうもらってるわけで、手コキは次に回したほうがいいかなと……思うんです」
莉沙子は意外そうな顔をしていたものの、瞬く間に眉を顰め、今度は疑惑の眼差しを向けてきた。

性欲旺盛な少年の突然の心変わりに、いかにも不審感を抱いているようだ。
「……ははっ」
愛想笑いでごまかそうとしたとたん、美麗なお姉さんは眉尻を吊りあげ、素早くジッパーを引き下ろしていった。
「あ、あ、り、莉沙子さん、待ってっ！」
「だめっ、何か様子がおかしいもの」
「や、やめて、くぅぅぅっ」
「あっ、やっ！」
「ひぃやぁぁっ」
ズボンの合わせ目がぱっくりと開き、下腹部を包んだ下着が露になる。
童貞少年はなんと、莉沙子からプレゼントされた使用済みのパンティを身に着けていたのである。

4

裕太は俯いたまま、莉沙子は口に両手をあてがい、目をこれ以上ないというほどひ

ん剥いていた。
（し、しまったぁぁっ、すっかり忘れてたよぉぉっ）
手コキという至福のご褒美に、正常な思考回路がすっかりショートしてしまった。
顔が耳たぶまで真っ赤になり、全身の毛穴から脂汗が一斉に溢れだす。
自ら強いた一週間の禁欲生活は、思春期の少年に想像以上の苦しみを与えた。
獣じみた性欲に翻弄され、股間に指が伸びかけたことも一度や二度ではない。
狂おしい性衝動を少しでも和らげんと、裕太は莉沙子のパンティを三日前から穿きつづけていたのである。
「し、信じられない……さ、最低」
「あううっ」
吐き捨てるような侮蔑の言葉に、羞恥と後悔の念が打ち寄せる。
裕太は下を向いたまま、悲壮感たっぷりの呻き声をあげた。
それでも股間の肉槍は萎えず、こんもりとした膨らみを見せている。
幸いにもペニスはウエストラインから飛びでていなかったが、伸縮性に富んだ布地は勃起の形に盛りあがり、限界ギリギリまで張りつめていた。
「いつから……穿いてるの？」

「……み、三日前です」
「三日前⁉　汚いじゃないっ！」
「ご、ごめんなさいっ」
恥ずかしくて、莉沙子の顔をまともに見られない。
ひょっとして、完全に嫌われてしまったのではないか。
思わず目を背けると、やるせなさそうな溜め息が耳朶を打った。
「……脱いで」
「へ？」
「すぐに脱いで」
「だ、だって、こんな場所で……」
泣き顔で振り返れば、莉沙子は尖った視線を向けている。
怒った表情は胸が甘く疼くほどかわいかったが、今は悠長な気分に浸っている場合ではなかった。
「そんなことさせるために、あげたんじゃないんだから。さ、早く」
「でも、下には母さんがいるし」
「パンティを脱いだら、またズボンを穿くの」

「ノ、ノーパンで勉強するんですか？」
「そうよ、何か文句ある？」
「あ、ありません」
女神の言うことには逆らえない。
蛇に睨まれた蛙とばかりに、裕太は椅子から立ちあがり、ジーンズをためらいがちに下ろしていった。
冷ややかな眼差しが肌にチクチクと突き刺さる。
年頃の男の子がパンティ姿を異性に見せるのだから、まさに身が引き裂かれるほどの羞恥だった。
「まったく……ホントに変態なんだから」
莉沙子は椅子の上で腕と足を組み、相変わらず凛とした表情を崩さない。
裕太は彼女の視線から逃れるように背を向け、パンティを即座に剥き下ろしていった。
（ちょ、超恥ずかしいっ！）
彼女の位置から、臀部は丸見えの状態だろう。
純白の裏地には、先走りの濡れジミがべったりとついていた。

三日間も穿いていただけに、中にこもった臭気が自身の鼻先にまで漂ってくる。
こんな状況にもかかわらず、ペニスはいまだにまがまがしい昂りを見せ、バネ仕掛けのおもちゃのように跳ねあがりながら我慢汁を翻した。
（あぁ、やばい。チンポが全然小さくならないよ）
素早い動きでパンティを足首から抜き取り、電光石火の早業で再びジーンズを穿いていく。
ウエストのホックをとめると、裕太はようやく安堵の胸を撫で下ろした。
「……椅子に座って」
「は、はい」
抑揚のない口調を聞いた限り、まだまだ予断は許さない。
少年は小さく丸められたパンティを手に握りしめたまま、恐るおそる椅子に腰を下ろした。
（こ、このあと、どうするんだろ？　それにこのパンティ、ずっと持ったまま勉強なんかできないよな）
ただおどおどするなか、美人女子大生は突然、手の中のパンティを引ったくる。
あっと驚きの声をあげた直後、彼女は平然と言い放った。

「おチンチン、出して」
「へ？」
「へじゃないの。聞こえなかった？　おチンチンを出してって言ったの」
唖然とすれば、莉沙子はニコリともせず、相変わらず厳しい視線を投げかけている。
なんと、凛々しい表情を見せるのだろう。
毅然とした態度には、理屈抜きでうっとりとせざるをえない。
今の裕太は莉沙子のしもべであり、まさしく恋の奴隷だった。
彼女の口から放たれる一言一句は、神の啓示と同じなのだ。
狂おしいほどの情火に焼かれ、下腹部が猛烈な性欲に苛まれた。
（や、やるしか……ないよな）
早くも肩で喘ぎつつ、ズボンのチャックを下ろしざま、右手を合わせ目の中に潜りこませる。
痛いほど硬くなったペニスを中から引っ張りだしたとたん、心臓が早鐘を打ち、射精感は一気にリミッターを振り切った。
（み、見られてるっ！　勃起したチンポを、莉沙子さんに見られているんだ!!）
自分には露出癖まであるのか、莉沙子の目がそばにあるというだけで異様な昂奮に

衝き動かされる。
剛直は青竜刀のごとく反り返り、肉胴には太い青筋が何本も浮きでていた。
自制のストッパーは完全に外れ、もはや勉強に集中することはできない。
莉沙子は椅子ごと前に進み、股間を食い入るように凝視すると、またもや白い指を伸ばした。
(あ、あ、ま、まさか!? じ、じかにぃぃぃっ!?)
ふっくらとした指腹が、汗でテカる肉棒にそっと絡みついていく。
「お、おふぅぅっ!」
四肢が震え、白濁のマグマが火山活動を開始した。
腰をよじらせ、全身に力を込めるも、少しでも油断をすれば巨大な快楽に呑みこまれそうだった。
「私がいいって言うまで、イッちゃだめだからね」
「は、はいぃぃっ」
奥歯をギリリと噛みしめ、必死の形相で放出の先送りを試みる。
射精感が徐々に薄れていくと、裕太は涙目で小さな息を吐いた。
「我慢できそう?」

「だ、大丈夫です」
「ふふっ。裕太君のおチンチン、すごく熱くなってるよ」
「あぁっ」
「大きさも太さも申し分ないし、もうすっかり大人だね。でも……」
「え？　あぐっ⁉」
「おチンチンの皮は、ちゃんと剥いておかなきゃだめよ」
指先に力が込められ、亀頭を三分の一ほど包んでいた包皮が剥き下ろされる。
「くわっ」
ペニスの先端にピリリとした疼痛が走り、裕太は思わず前屈みになった。
「我慢して」
「は、はい……あ、くふぅぅっ」
「ほら、ちゃんと剥けたわ」
惚けた表情で股間を見下ろせば、包皮はいつの間にか雁首できれいに反転している。
まっさらな亀頭冠は、いかにも過敏そうな皮膚をすっかり露出させていた。
清廉な美人女子大生に、まさか包茎矯正までされようとは。
どう考えても莉沙子はバージンではなく、かなりの性体験を積んでいるに違いない。

いったいどんな男が、彼女に大人の世界を教えたのか。
胸の奥がチクリと痛んだ。
「ふだんから、こうしておくんだからね」
「は、はいっ……あっ」
ホッとしたのも束の間、莉沙子は猛烈な勢いで右手をスライドさせた。
「あ、あ、あうぅぅっ」
「私の下着で、二度と変なことはさせないから」
ふにふにとした指腹から、美女の体温がはっきりと伝わる。
自分の指の感触と、なぜこんなにも違うのだろう。
指が抽送を繰り返すたびに、心地のいいバイブレーションが大きな振動となって肉体の深部に伝播する。
「あ、あ、あ……」
裕太は椅子に背もたれ、だらしなく開いた口からは今にも涎がこぼれ落ちそうだった。全身の筋肉は引き攣り、身体をまったく動かせない。
鈴口から溢れでた前触れの液が胴体に滴り、莉沙子の指の隙間にすべりこんではニチャニチャと卑猥な音を奏でた。

蛇腹のように動く包皮が雁首を何度もこすりあげる。
瞼の裏で白い光が明滅し、欲望の塊が排泄口へと集中する。
美しきお姉さんは顔を間近に寄せ、怒濤の手コキで肉棒をしごき倒した。
「私の顔を見て」
恥じらいながら視線を向ければ、莉沙子はキッと睨みつけている。
凛々しい顔立ちに胸が騒ぎ、いやが上にも牡の情欲が臨界線を突破した。
「正直に答えて」
「は、はい」
「ずっとオナニーばかりしてたのね？」
「そ、そ、そうです」
「だから、先週の小テストは成績も悪かったんでしょ？」
「ご、ごめんなさぁい」
叱責を受ければ受けるほど、昂奮のパルスが脳幹を焼きつくしていく。
もっと叱ってほしくて、裕太は言わなくてもいいことまで暴露した。
「莉沙子さんの言うとおり、またアイコラを作っちゃいました！」
「何ですって⁉」

「で、でも、自分への戒めのために、この一週間はずっと禁欲してたんです！」
「人のパンティ穿いて、何が戒めよ！」
「は、くほぉぉぉぉっ!!」
美女がさらに目尻を吊りあげ、手のひらで肉筒をギューギューとこねまわす。
「いやらしいことが考えられないように、エッチなミルク、今日は一滴残らず搾り取るからっ」
「はうううっ！」
莉沙子の口から淫語が放たれた瞬間、一気に射精へのカウントダウンが始まった。
快楽の風船が中心部で膨らみ、灼熱のマグマが射出口をノックする。
肉棒がひと際しなり、腰の裏側がジンジンと疼く。
憧れの異性にペニスをしごかれ、さらには射精の瞬間まで見られてしまうのだ。
バラ色の愉悦が身を覆い尽くし、この世のものとは思えない激情の嵐が襲いかかった。
「あ、あ、イクっ……イッちゃいます」
肉筒が大きくひくついた瞬間、裕太は目をカッと見開いた。
莉沙子が、手にしていたパンティを亀頭の先端に押しあてたのである。

（あっ⁉）
このまま射精すれば、至高のお宝は白濁まみれになってしまう。
パンティを使用したオナニーは何度も繰り返してきたが、裕太は自身の体液で汚さないように細心の注意を払ってきた。
倒錯的な行為を二度とさせないために、莉沙子は下着をザーメンで汚すつもりなのだろう。
（や、やばいっ！　あぁぁぁぁっ！）
少年の意思とは無関係に、若々しい精のエキスが輸精管へとなだれ込む。
「いけないおチンチンは、たっぷりとお仕置きしてあげるから！」
美女のキッとした表情が射精感にさらなる拍車をかけ、裕太は両足を突っ張らせながら牡の欲望を爆発させた。
「イクっ……イクぅぅっ」
「たっぷりと出すんだからね」
熱い塊が体内から放出され、下腹の奥に凄まじい鈍痛感が走る。
ペニスは脈動を延々と続け、パンティの下で飽くことなき放出を繰り返していた。
これほど気持ちのいい射精は生まれて初めてのことだ。

理性もモラルも吹き飛ぶほどの恍惚に、思考が一瞬にして雲散霧消する。
「すごい……まだ出てる」
莉沙子は猛烈なスピードで肉胴に指をすべらせたあと、根元から先端に向かって皮を鞣すようにゆったりと絞りあげた。
「きゃンっ」
尿管内の残滓が高々と跳ねあがり、パンティを飛び越えて真っ白なノートに着弾する。裕太は気怠げな表情で、いつまでも素晴らしき射精の余韻に浸っていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/